"In My Mind's Eye"

—— *Hamlet* の一考察——

杉　本　和　世

I　序

Hamlet は十六世紀末期から十七世紀初期にかけて，英国に現われた一連の復讐悲劇から刺激を受けて執筆されたものであると同時に，同種の劇が更に続出する契機となったというのが今日の定説である。*Hamlet* の直接の種本であろうと推定される作者不明の Ur-*Hamlet* をはじめ，七つ程の復讐悲劇がこの頃あい前後して上演されている。

しかし，近親関係にあるこれらの復讐悲劇と比較した場合，*Hamlet* は純然たる復讐悲劇とは断定し難い。一方，復讐を取り除いてしまえば，*Hamlet* が成立し得ないことも確かである。復讐遷延の問題が *Hamlet* 批評史上最大の争点となる所以はここに存在する。周知のように，A. C. Bradley は復讐遷延についての従来の諸論議を，㈠外部障害説，㈡良心説，㈢感傷説，㈣瞑想説の４つに分類し，彼自身は瞑想説の修正延長である憂鬱説を提唱した[1]。Bradley のこの見解は行動的 Hamlet 説出現にもかかわらず，その後の批評に大きな影響を与えていると考えられる。

そこで，本稿は，思索癖に陥りがちな主人公 Hamlet の思考形態の特徴，即ち，彼の旺盛な思考の内部構造を検討することによって，復讐遷延の問題を考察し，あわせて芸術手法上の問題に言及しようとするものである。

II　Frailty Thy Name Is Woman !

O, that this too sullied flesh would melt,
Thaw and resolve itself into a dew,
Or that the Everlasting had not fixed
His canon 'gainst self-slaughter. O God, God,
How weary, stale, flat, and unprofitable
Seem to me all the uses of this world !
Fie on't, ah fie, 'tis an unweeded garden
That grows to seed, things rank and gross in nature
Possess it merely. That it should come to this,

2

But two months dead, nay not so much, not two,
So excellent a king, that was to this
Hyperion to a satyr, so loving to my mother,
That he might not beteem the winds of heaven
Visit her face too roughly—heaven and earth
Must I remember ? why, she would hang on him
As if increase of appetite had grown
By what it fed on, and yet within a month,
Let me not think on 't … frailty thy name is woman !
A little month or ere those shoes were old
With which she followed my poor father's body
Like Niobe all tears, why she, even she—
O God, a beast that wants discourse of reason
Would have mourned longer—married with my uncle,
My father's brother, but no more like my father
Than I to Hercules, within a month,
Ere yet the salt of most unrighteous tears
Had left the flushing in her galled eyes
She married. O most wicked speed … to post
With such dexterity to incestuous sheets !
It is not, nor it cannot come to good,
But break my heart, for I must hold my tongue. (I. ii. 129—159)[2]

Hamlet の素顔の全貌を我々に初めて提示するのが，この第一独白である。我々はこの劇の筋書を熟知しているために，Hamlet の心情に容易に同化してしまうのであるが，白紙の状態のまま第一独白に接するならば，その論理の展開の特異性は我々の注意を喚起せずにはおかないであろう。現段階において Hamlet は夜毎父王の亡霊が出没する不穏な事態について，何も知っていないということを念頭に置くならば，この独白が持つ不自然さは一層明確になる。

母親 Gertrude を含めた女性一般に対する過度の嫌悪感が，この独白の骨組の一つを構成している。父王の死後まもなく母親が叔父と結婚したという事実，即ち，Gertrude 一個人の不実な行為を根拠として，女性はすべて不実であるという極端な一般的命題へ飛躍するのが Hamlet の論理の特徴である。この独白の直前に置かれた宮廷の場において，我々の前に登場する Gertrude は母親としての情愛に欠けてはいない。ところが，Gertrude のそういう他の側面を一切無視して，不実な行為を一面的に，絶対的に誇張させた結果がこの一般論である。

しかも，女という共通項によって Gertrude と結ばれる Ophelia もまた，Hamlet にとっては不実であるとしか考えられないのである。事実の一面を捕えて導いた結論である，"Frailty the name is woman" という先入観，ないし，固定観念に支配された Hamlet は，現実を歪曲化してしまい，事実を事実として客観視し得なくなるのである。

有名なこの台詞に見られる性急な論理的飛躍は，第一独白冒頭にある Hamlet 自身への言及にもうかがえる。個から全体へと問題を波及させる時の思考過程が，全体から個へたちかえる際にも働いているのである。神の掟に反する自殺を願わしめる程に激しい，自己の肉体に対する嫌悪感は，眼前の Gertrude がまさに人間全体の堕落の姿であると断定するところから生じた，人間への絶望の裏返しに他ならない。 "The courtier's, soldier's, scholar's, eye, tongue, sword, ／Th' expectancy and rose of the fair state, ／The glass of fashion, and the mould of form, ／Th' odserved of all observers. (Ⅲ. i. 154—157)" と讃美され，Renaissance の理想的人間であるにもかかわらず，自己に対しても人間の一側面である要素を拡大して適用するのである。

以上に見られるような Hamlet の思考の方向，即ち，現実を自己の固定観念に合致させようとする姿勢は，彼の時間意識にも反映されている。彼の台詞のうち，時間に言及している個所を抜粋してみよう。

1. But two months dead, nay not so much, not two
2. and yet within a month
3. A little month or ere those shoes were old
   With which she followed my poor father's body
   Like Niobe all tears
4. within a month,
   Ere yet the salt of most unrighteous tears
   Had left the flushing in her galled eyes
   She married.
5. O most wicked speed … to post
   With such dexterity to incestuous sheets !

(以上第一独白)

6. the funeral baked meats
   Did coldly furnish forth the marriage tables.

(Ⅰ. ii. 180—181)

7. look you how cheerfully my mother looks, and my father died within's two hours. (Ⅲ. ii. 124—125)

劇進行とともに経過する時間とは逆方向に Hamlet の時間意識が進んでいることが，上の引用

から解る。時間が客観的世界を計る一つの尺度であるとすれば，以上の台詞の中にも，客観的現実から遊離したHamletの主観過剰な思考が顕著に示されている。

今，第一独白を中心として，Hamlet の自己を含めた人間観，時間意識を考えてきたのであるが，この二つに見られる彼の思考形態の特徴は，一言にするならば，終着点のない主観的観念論の空回りと言えるであろう。Hamlet は "In my mind's eye (Ⅰ. ii. 185)" でもって物事を見ているのであり，彼の目に映るものは "bodiless creation (Ⅲ. iv. 138)" の色合が濃厚である。

Ⅲ To be, or not to be, that is the question.

第一独白の直後，即ち，この劇全体を貫く Hamlet の思考形態の特徴が明らかにされた直後，Hamlet は父王の亡霊出現の件について知らされる。亡霊は一体いかなる目的のためにHamlet に会おうとしているのか。Hamlet とともに亡霊の言葉の中心をなす個所を聞いてみよう。

Revenge his foul and most unnatural murder.

. . . . . .

Murder most foul, as in the best it is,
But this most foul, strange and unnatural.

(Ⅰ. v. 25—28)

If thou hast nature in thee bear it not (Ⅰ. v. 81)

九十行に満たない亡霊の全台詞の中に，"nature", "natural," "unnatural" の三語が繰り返し用いられている。"nature", 及び，その派生語である "natural", 'unnatural", は ambivalence と ambiguity を特色とする Renaissance 期に新しい種々の意味を獲得したが，その根幹をなす考えは，"we human beings in our natural condition"[3] である。そういう含蓄を持つ "nature" の名のもとに，亡霊が Hamlet に復讐を命じていることに注意を払わなければならない。Hamlet の復讐は単に父親の仇討という個人的な意味から脱け出して，人間の存在の根源にかかわりあいを持つのである。更に，ここには，すべての事象を一般的様相のもとに考えるという，Elizabeth 朝人特有の思考傾向が潜在していると思われる。先に見てきたような特色を帯びた思考に拠っているHamletに対して与えられた命令は，個別具体的な事柄を抽象的一般的命題へと発展させる性格を持っているのである。

そこで，当然の帰結として，Hamlet の思考は「人間とは何か」を中心軸として展開することになる。Gertrude の行為を女性一般の属性であると解釈した Hamlet は，Claudius の行為を同じ視点から捕え，人間一般の行為であると拡大解釈するのである。数多い「動物」や「病気」「腐敗」の image[4] によって表現される行為に陥る人間とは一体何なのか。人間の存在についての根源的な問題が前面に浮かび上ってくる時，復讐が人間を対象とするものであるい

じょう，復讐の課題は後退せざるを得なくなり，*Hamlet* はいわゆる復讐劇の範疇から逸脱する。

それでは，Gertrude や Claudius の行為を目にする以前の Hamlet が抱いていた人間観とは一体どのようなものであったろう。

What a piece of work is a man, how noble in reason, how infinite in faculties, in form and moving, how express and admirable in action, how like an angel in the apprehension, how like a god: the beauty ot the world; the paragon of animals …（Ⅱ. ii. 307—311）

我々は Hamlet のこの台詞が同じ勢いで高揚していくものと期待する。しかし，調子は急変して，奈落の底へ突き落とすような衝激を与える。

and yet to me, what is this quintessence of dust?（Ⅱ. ii. 311—312）

この変化をもたらしたのは，Gertrude と Claudius の行為以外のなにものでもない。近親相姦，国王暗殺という，獣に等しい行為に出会うまで，Hamlet は物事の良い側面のみを見て人間の尊厳を謳歌してやまなかっただけに，その衝激の程は我々の想像を絶するものであろう。今や

The Time is out of joint.（Ⅰ. v. 188）

Denmark's a prison.（Ⅱ. ii. 246）

となってしまったのである。

Hamlet の台詞に見られるこの相対立する人間観は，中世の黄昏であり，同時に近世の曙であった当時において，葛藤していた二つの人間観である。[5] 人間を "the paragon of animals" であると讃美する中世的楽天的見解は，理性という砦を根拠として，調和と秩序の中に人間を見るものであった。ところが，Machiavelli や Montaigne, Hobbes が，天文学における Copernicus 的転回を，人間観の面で行なったのである。宇宙に関する対立的見解が，先に引用した Hamlet の台詞の直前に平行して述べられているのは，こうした事情を物語るものであろう。Machiavelli, Montaigne, Hobbes の説によれば，人間の理性は非常に脆いものでしかなく，人間は天使よりもむしろ動物に等しい。従って，欲望と闘争が人間社会にくりひろげられる。究極的には "we human beings in our natural condition" と規定される "nature" という語は，こうした歴史を背景にして，全く対立する意味を同時に持っているのであり，Hamlet の懊悩と彷徨はこの二つの意味の衝突，矛盾の中に存在するのである。Hamlet は中世の位階社会を基盤とする王候でありながら，Luther の大学，Wittenberg の学生として登場しているところに問題がある。

人間の存在が問題として提起されれば，復讐の課題は背後に退却しなければならないわけであるが，加えて，Hamlet は現実の人間を天使か動物か，"the paragon of animals" か "quintessence of dust" か，いずれか一方に分けてしまわなければならないとしている。彼

にとっては，その中間的存在はあり得ないし，発展の過程において両者が相互に転化し得るものとしてはとらえられない。一方への称讃は他方への憎悪となる。亡き父王への Hamlet の異常な憧憬は A. C. Bradley によって指摘されるところであるが[6]，父王は "Hyperion", "Hercules", "Jove", "Mars", "Mercury" 等，神話の神々や英雄に喩えられているのに対し，Claudius は Hamlet には "satyr" であり，Denmark の病根である。reason と blood の併立使用など，Hamlet の台詞には正負対極関係にある語が用いられている場合が多々ある。第四独白，"To be, or not to be, that is the question" の表現形態がその最も代表的なものである。この不可解な文に始る独白において，復讐か否か，自殺か否か，いずれかを Hamlet は問題にしていると一般に解釈されているのであるが，ここで注目しなければならないのは，be 動詞，不定詞という極めて抽象化，一般化された表現であろう。ここには復讐と自殺という二つの問題を含めて，諸々の問題が二者択一の形で集約して提出されているのである。第一独白における一人称単数は，ここでは一人称複数になっている。Gertrude, Claudius の行為は Hamlet にとって "we human beings" の問題なのである。第一独白に見られる，自己の生命への激しい嫌悪，自虐的裁断，"Get thee to a nunnery (Ⅲ. i. 121)", "go thy ways to a nunnery (Ⅲ. i. 130)" の言葉に現われた Ophelia への冷酷な態度は，自身をも，そして罪のない Ophelia をも穢れた存在であると考えずにはおれない Hamlet を示している。Claudius は明らかに Richard 三世から始る王候殺しの系譜に属し，Gertrude は Goneril, Regan，そして，Lady Macbeth に至る過程の人物である。しかし，一幕二場，宮廷の場における Claudius の事務的外交的手腕は，王としての資格に充分足るものである。また，亡霊自身，Gertrude に対して寛大な態度をとっており，Ophelia の溺死について Gertrude が報告する美しい叙述は，徹底した悪役には与えられない台詞である。ところが，そういう事実を隠蔽し，複雑な事象の一つを誇張解釈するところから生れる Hamlet の感情が現実を通り越してしまっている。従って，客観的現実から遊離した彼は，必然的に行動がとれなくなる。彼は現実に密着しない思考法に拠りながら，一方では現実問題に対処しなければならないという窮地に陥っている。遅延されていた復讐の主題が急速に展開し始めるのは，Claudius が奸計にたけた権謀術数の王として，悪一色に描かれる頃からである。Claudius が完全な悪玉でない限り，復讐の対象とはなり得ない。

Ⅳ 結

客観的現実世界から遊離した Hamlet の主観的観念論という思考形態，その結果生じる行動不能の問題は，芸術的見地から言えば，Hamlet の感情を明瞭に客観化する一連の対象物，情況，事件，即ち，objective correlative[7] が作品の中に見い出されないということである。Shakespeare がこうした芸術的欠陥を克服するための模索試練の期間が，*Hamlet* に続く問題劇の時期であると考えられないであろうか。*Hamlet* と四大悲劇の二番目の作品である

Othello との間に執筆された問題劇の特徴は，allegory の色彩が極めて強くうち出され，登場人物の類型化の傾向が顕著になっていることに求められる。Hamlet の人間への凄絶な嫌悪，呪詛は，単純化，抽象化された悪玉に向けられるべきものである。天使と動物，善と悪（但し中世的人間観から見た場合）という antithesis を形象化し，「人間とは何か」という問題を描く突破口として，Shakespeare は依然残っていた中世道徳劇の要素を大きく取り入れて，allegory の方法を採用したものと思われる。[8] Claudius, Gertrude は Iago, Edmund, Macbeth, Goneril, Regan, Lady Macbeth へと成長発展し，これらの登場人物は Desdemona, Cordelia と対照点に位置する人物として造形されている。しかしながら，Shakespeare は allegory の手法を全面的に受け入れるのではなく，それを継承発展させている。即ち，登場人物を徹底した悪役，あるいは善役として描きながら，しかも，中世道徳劇が持っている単調な図式主義を克服している。主人公である Othello, King Lear は，各々対立陣営に属する登場人物の間にあって，「人間とは何か」を問い質すために遍歴を続ける。中世から近世への過渡的混乱期において混迷する人間の典型が，かれらにおいて創造されている。*Hamlet* と同じく，"nature", "natural", "unnatural" の三語が支配語になっている *Othello, King Lear, Macbeth* においては，当時の人々の心を捕えて離さなかった，「人間とは何か」という根本的な問題に劇的解答が与えられている。

註

(1) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (London, 1904; 1963), pp. 74—102.

(2) 引用は *The New Cambridge Shakespeare., Hamlet,* ed. J. Dover Wilson (Tokyo, 1961) による。

(3) C. S. Lewis, *Studies in Words* (Cambridge, 1960), p. 54.

(4) C. F. E. Spurgeon *Shakespeare's Lmagery and What It Tells Us* (Cambridge, 1935; 1965), pp. 79, 133—134, 213, 316—318, 369.

W. H. Clemen, *The Development of Shakpeseare's Imagery* (London, 1951; 1963), pp. 117—118.

(5) 当時の世界観，人間観の対立については，

E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (London, 1943; 1960).

Theodore Spencer, *Shakespeare and the Nature of Man* (New York, 1942)

John F. Danby, *Shakespeare's Doctrine of Nature: A Study of "King Lear"* (London, 1949)

に詳しい。

(6) A. C. Bradley, *op. cit.*, p. 88.

(7) T. S. Eliot, *Selected Essays* (London, 1963), p. 145.

(8) Shakespeare の作品における道徳劇および allegory の要素について指摘したものに

Hardin Craig, "Morality Plays and Elizabethan Drama", *SQ*, I, (1950), 64—72.

A. C. Bradley, op. cit., pp. 216—217.

D. G. James, *The Dream of Learning : An Essay on "The Advancement of Learning"*,

8

"*Hamlet*" *and* "*King Lear*" (Oxford, 1951), pp. 84—86.

G. W. Knight, *The Wheel of Fire : Interpretation of Shakespearian Tragedy with Three New Essays* (London, 1959), p. 177.

Maynard Mack, "*King Lear*" *in Our Time* (London, 1966), pp. 57—58.

がある。